



理論と実践の接点を求めて

立木 正（東京）

第54回全国体育学習研究協議会東京大会が、2009（平成21）年11月20日（金）～23日（月）に、「『楽しい体育』のカリキュラム開発～授業づくりを核にしたカリキュラムの検討～」のテーマのもと、東京で開催される。

21世紀に生きていく児童・生徒一人ひとりに、学校教育、学校体育で、今、どのような力を身につけていったらよいのであろうか。

社会に目を向けると、「高齢化社会」が押し寄せている。世界保健機関（WHO）の2009年版の「世界保健統計」によると、2007年時点での日本人の平均寿命は83歳で世界一である。男女別では、日本の女性が86歳で世界一。日本の男性は79歳で世界第三位の平均寿命である。

教育現場に目を向けると、教育基本法や学校教育法、学校教育法施行規則が改正され、平成20年3月28日に学習指導要領が改訂、公示された。

生涯スポーツを見据えた学校体育における学力や基礎・基本をどのようにとらえ、どのように学習と指導を進め、授業づくりをしていくかは、今

後の重要な課題となる。

全体研では、30年以上も前から「楽しい体育」の理論構築と授業実践をつみかさね、理論と実践の往還を図ってきた。民間教育団体として、日本の体育科教育の先駆的な役割を果たしてきたと言っても過言ではない。

しかし、「楽しい体育」の考え方、とらえ方の誤解や批判もあったことは事実である。本、東京大会が、今後の日本の体育授業の充実・改善の先導的試行・実践の契機となり、体育授業づくりの方向性を示唆する大会になることを期待する。

一人ひとりの児童・生徒が、運動の楽しさや魅力を味わい、深め、発展させ、自ら課題を設定し、仲間と協働し合いながら、創意・工夫、努力を惜しまず、意欲的、主体的に課題解決を図ることのできる授業づくりをしたい。

児童・生徒が一生涯、運動を生活の中に取り入れ実践、継続できるよう、教師の指導力、実践的力量が今まで以上に重要となり、理論と実践の接点を求めた授業力向上が期待される。

◆ も く じ ◆

＜巻頭言＞理論と実践の接点を求めて／立木 正 ……	1
＜特集＞第54回全国体育学習研究協議会 東京大会に向けて	
●研究委員長から／鈴木秀人 ……	2
●授業提案者の立場から	
・体操／志賀克哉 ……	3
・タグラグビー／笠松具晃 ……	4

・タグ・ラグビー／谷口善一 ……	5
・ハンドボール／浅井百合香 ……	6
＜特集＞竹之下休蔵 生誕百周年	
●ある時、竹之下先生は…／沢田和明 ……	7
●「思い出すことなど」／江島 紘 ……	8
＜事務局だより＞ ……	9
＜編集後記＞ ……	9

■ 特集 ■ 第54回全国体育学習研究協議会東京大会に向けて

●研究委員長から

東京大会を迎えるにあたって

全体研研究委員長 鈴木 秀人（埼玉）

2年続けて研究委員会を中心とした開催という異例の事態になりましたが、東京での全国大会が迫ってきました。現在の研究委員会の体制になってちょうど2年めですので、この2年間のひとつのまとめとして、研究委員会ではこれまでの議論を踏まえ、そこから見える問題の解決と授業提案を結びつけるべく、現在、最後の検討に入っているところです。

すでにご承知のように、この2年間は「体操」「ボールゲーム」「ダンス」「低学年の運動」「中学・高校」という5つの領域に焦点を当て、実際の授業づくりと意図的に関連を持たせながら『楽しい体育』のカリキュラムの在り方を検討してきたわけです。

体操では、アゴーンでもミミクリイでもない運動としてのその可能性を探る中で、体操は「自発」ではなく「自主」という従来の捉え方が繰り返し議論の対象になっています。具体的には、体操として行う運動の動きの面白さの学習は、果して体操の学習として考えられるのかどうかということです。学習指導要領の改訂に伴って「体づくり運動」が低学年まで下ろされたことによって生じている、「体づくり運動」の授業研究のある種ブームのような状況の中に見られる問題も冷静に分析しながら、今まであまり注目されてこなかった『楽しい体育』における体操の授業の在り方について、ある方向性を示したいと考えています。

ボールゲームでは、分類論の必要性が度々議論されてきました。基本的には構造的特性に依拠したそれを、『楽しい体育』の授業を考える拠り所のひとつに据えることをめぐる議論です。また、戦術学習が強調される昨今の状況を批判的に捉えながら、それとは異なる『楽しい体育』のボールゲームの授業の在り方を改めて確認していく過程で、ボールゲームに止まらず、『楽しい体育』の学習内容に関わる大切な視点も見えてきつつあります。この辺を、授業提案とも関わらせながら考えているところです。

ダンスでは、今まで積み上げてきた研究成果が十分に共有化されていない現実を合宿研で問題として指摘しましたが、それを乗り越えていくために何をどのように改善しなければならないのかを引き続き検討する必要があると感じています。中学校学習指導要領の改訂でダンスが必修化されたことによって生じる諸問題にも目を配りながら、『楽しい体育』の立場から、ダンスの授業づくりを活性化させていく道筋を探っているところです。

低学年の運動は、合宿研や昨年の全国大会での授業実践をもとに、あえて低学年の運動を『楽しい体育』の立場から特別に考える必要があるのかという方向に、議論は言わば戻りつつあります。ただ、もう一度低学年の運動について議論を始めた問題意識を思い出しながら、他と何が共通で違うものは何なのかを整理した上で、一定の方向性を見出したいと思います。

中学・高校では、合宿研でクローズアップされた上手な子の存在をひとつの手がかりに、全体研がカリキュラム構築の視点にしようとしている「洗練化」とは対極にあると考えられる姿を示すそれらの子たちに見られる問題の解決をはかりながら、授業づくりの研究を進めています。

全国大会の授業提案は、これらの領域の中からダンスを除く4つと関連する授業が出されることになり、問題提起では、合宿研における反響も考慮して、学習指導要領の改訂を契機に生じている教育現場の状況と、そこでの全体研の仲間に見られる一種の動揺を再度問題として取り上げる予定でいます。『楽しい体育』の志を共有する全国の仲間のご参加をお待ちしています。

●授業提案者の立場から（体操）

学校の実態に応じた低学年の体づくり運動

大田区立松仙小学校 志賀 克哉（東京）

本校は全校児童、約760名の比較的に規模の大きい学校である。児童数に対して校庭の広さは十分だとは言えず、安全面などで常に課題を抱えている。昨年度の年度末反省で、休み時間の体育館開放が話し合わせ、今年度から4年生以上に対して、バスケットボールのゲームをする場として体育館を開放することになった。校庭での混雑緩和の取り組みではあったが、混雑状況は十分に改善されたわけではない。

そのような学校の実態があるため、休み時間の遊びのルールも前任校とは状況が異なる。例えば、貸し出し用のボールを自由に使って遊ぶことはできず、クラスに配布された2つに使用は限られている。また、安全面への配慮から、ボールを蹴って遊ぶことや「てんか」と呼ばれる遊びは禁止されており、本校は、ボールを使った遊びの経験が自然と少なくなる環境と言える。

次にクラスの実態を見てみる。私が担任をしている31名の1年生のクラスでは、休み時間に校庭で「外遊びを必ずする」という児童が18名、「だいたいする」という児童は11名であり、多くの児童が積極的に外遊びをしている。

外遊びでよく行う遊びの種類を調査したところ（複数回答可）、休み時間に外遊びをする児童の多くは、校庭の固定遊具を使って遊んでいることが分かった（20名）。また、用具を使わない、鬼ごっこなどで遊ぶ児童が9名いた。その一方で、用具を使って遊ぶ児童は非常に少ない。輪は7名、一輪車は3名、竹馬は1名、長なわは1名である（高学年に入れてもらっている）。休み時間に自由に使えるボールが、クラスボールだけという制約もあり、ボールを使った遊びは5名であった。

実態調査からは、外遊びへの意欲は高いものの、用具を使った遊びがほとんど行われていないという実態が明らかになった。

このような実態を基に、本校の1年生で年間

3回に分けて位置付けてある体づくり運動において、最初の単元は、休み時間に自由に使うことができ、数も十分に保障されているフープとなわに注目して「あつまれ！あそびめいじん1」を行った。この中で、フープやなわを使って、今できる運動遊びを十分に楽しませ、単元の後半から工夫していく視点を教師から与え、児童自身が運動遊びに工夫を加えて楽しむように指導した。単元の終わりに発表会を設定したが、発表することが主たる目的ではなく、発表会で新しく知った遊びを、発表会の後に設定した「やってみタイム」でチャレンジさせ、運動遊びを広げていこうと考えて実践を行った。

11月20日の東京大会で行う実践は、「あつまれ！あそびめいじん2」で、体づくり運動の2単元目になる。先ほども述べたように、学校やクラスの実態から、学校での経験が少ないボールを使った運動遊びをメインに構成し、ボールに十分触れさせたいと考えている。そこで、ボールを使った楽しい運動遊びの種類を、単元を通じて広げていくことをねらいたい。単元のはじめでは、一人一人がボールに触れ、ボールを使った遊びの楽しさを十分に味わわせる。単元の後半は、一人ではなく、複数の友達と関わって楽しむ遊びを行うことで、休み時間でも、数少ないボールで友達と一緒に遊べるようにしていきたい。

私が低学年を担当したのは、教員歴11年目にして今年度が初めてである。もちろん、低学年の体育を実践したことも初めてで、日々、初任者に戻ったような気持ちで苦悩しながら授業を行っている。今回の実践は、学校とクラスの実態を基に、どう授業を展開していけば、体育で学んだことが休み時間などに生きてくるかを考えて構成した。当日の授業を、多くの先生方に見ていただき、忌憚のないご意見をたくさん頂戴したい。

●授業提案者の立場から（タグラグビー）

第54回全国大会の授業公開に向けて

東京学芸大学附属大泉小学校 笠松 具晃（東京）

「体育」と「クラブ活動」は違う。時々こんな言葉を耳にします。体育の学習とチャンピオンスポーツであるクラブ活動は同じスポーツ（種目）を取り扱っていても中身が違うという意味だと思います。しかし、本当にそうでしょうか。私はスポーツの楽しみ方が洗練された先にチャンピオンスポーツがあるのではないかと思います。逆に言うと、チャンピオンスポーツで結果が出せないような指導の考え方では、体育の学習でも子どもたちを本当に育むことができないのではないのでしょうか。

皆さんは全国小学生タグラグビー選手権大会をご存知でしょうか。今年で6回目の開催となり、全国で約1000チーム（1万人）の小学生が東京で行われる全国大会出場を目指して頑張っている大会です。私の指導していた前任校のタグラグビークラブは過去2度全国大会に進出し、準優勝・3位という成績を納めています。このチームでの指導法は特別なものではなく、普段の体育学習の授業の延長だと思います。子どもがゲームを楽しみ、自らで課題を見つけ、それを克服するため主体的に行動する。教師（コーチ）の役割は子どもたちが活動しやすい場の設定、課題を見つけるための情報提供（アドバイス）、ゲームをより高いレベルで楽しむために必要な基礎を身につけさせることです。当然通常の単元学習とは異なり、全国大会を目指すので決めた4月から練習が始まり、県大会、地区大会、そして全国大会とおよそ1年間という長い期間になります。しかし、体育学習自体が他教科の1時間完結の刑事ドラマ型課題学習と違い、単元を貫いて解決学習が行われていることを考えるとクラブ活動も体育の学習と目指す所は同じと言えないのでしょうか。

全国大会出場チームには正直子どもの運動能力の高さやトリッキーなサインプレーで勝ち上がってきたようなチームもあります。しかし、この全国大会でさらに勝つ進むことができるのは子どもたちが主体となってゲームの状況を判断しプレーを選択する力があり、いくつもの大会を通して自ら成長してきたチームです。ラグビーというスポーツは伝統的にキャプテンシーを重んじ、試合中の選手に対する指導者の指示は恥ずべき事だと考えられ、その精神はタグラグビーにもしっかり受け継がれています。

8年前にこのタグクラブを創設したきっかけは体育でタグを体験した子どもたちがもっとプレーしたいという希

望でした。その放課後の活動がロコミで広がり多いときには50名近い子どもの活動を私一人で指導していました。ただ、全国大会を目指す6年生以下（3年生～5年生）は子どもたちだけの遊びの世界です。自分たちでコートを作り、その日集まったメンバーを均等分けてチーム編成。うまくプレーが決まり得点した時は仲間とハイタッチ！ルールで文句が出た時には互いに集まって話し合う。（時々喧嘩にもなりますが）夏も冬も日が暮れるまでラグビーボールを持って駆け回って遊んでいます。この遊んだ経験があるからこそ子どもたちは全国大会というチャンピオンスポーツの高度で戦略的なチームプレーや作戦が理解できるのだと今は確信しています。

今回公開する授業の学級（6年生）は昨年春にタグラグビーの学習を経験しています。タグラグビーを通してクラスの誰もが運動する楽しさに触れました。今年5月に実践したバスケットボールでは単元最後にクラス内バスケットボール大会と、その結果をもとに力のあったチーム同士での学年大会を実施しました。これによって子どもたちはチーム一丸となって他チームと競い合うことの楽しみを味わいました。今回2回目のタグラグビーでは、それをさらに広げ対戦相手を学校の外に想定して単元計画を立てています。めあて1では「より多くの仲間とゲームが楽しめるルールに慣れよう」とし、広くタグラグビーイベントなどで普及しているルール（タグ回数の制限、オフサイドの要素を盛り込まれたもの）の理解に時間をあてます。これまでの学習では、クラスの実態に合わせてみんなが楽しめるクラス独自のローカルルールでゲームを進めていましたが、バスケットボールの経験からクラスを越えて広く対戦相手を求めるには共通のルールが必要で、普段の実力を出すためにはそのルールに慣れる必要があることを学びました。めあて2では「チームで協力して作戦を立てる」とし、そのルールのもとに自分たちの長所を生かした作戦を考え深めさせます。単元最後にまたクラス&学年大会を行い、さらにその先に全国大会東京都予選突破（希望者のみ参加）を目標に掲げることで学習を発展させていくことを計画しています。ルールの質を上げることと、学校の外にも目を向け高い目標に向って主体的に子どもたちが活動することでゲーム様相や楽しみ方がより洗練化されていくのではないかと思います。

●授業提案者の立場から（タグラグビー）

チームで協力して行うタグラグビー

東京学芸大学附属小金井中学校 谷口 善一（東京）

今年、全国大会が附属小金井中学校の公開研究授業と同じ日の開催となった。そのため、附属小金井中学校の研究主題である「課題意識を高め、自らの問いを深める教育課程づくり～学び合いを通して見つける価値ある学びとは～」を背景として、授業研究を進めていく。

【研究主題について】

教育課程とは、教育目標に基づいて作成された学校全体の指導過程を指す。その構造は、学校目標をもとに構造化されなくてはいけない。そのためには、学校目標の作成の経過やその意義、さらにいくつかの目標の相互的関連を明らかにする必要がある。本校としても、新しい教育課程に向けて学校全体の教育活動の根幹をなす部分の構造を明らかにしなくてはならない。

そこで、研究主題である「課題意識を高め、自らの問いを深める教育課程づくり」を、具体的な教育カリキュラム編成の中で、どのように実現していくか。それは、具体的な活動や指導場面における本校の実態を明らかにし、教科間での共通理解の上、教育目標の実現に向け、内容を検討することからスタートしたい。

【授業について】

今回授業は、第一学年における選択球技として、「タグラグビー」と「ユニバーサルホッケー」から選択して行うものである。公開するのは、タグラグビー選択者の授業である。

対象となる生徒は、小学校の授業で上記二つの種目の経験がある者と、初めて経験する者が入り混じっている。ここで考えたいのが、種目を選択するために生徒が持っている視点である。提示された種目に対し、例えば、自分が興味を持ったものと違っても、仲の良い友達を選んだ方を選ぶことがあるだろう。中学生の発達段階においては十分に予想されることではあるが、これは決して自主的な選択とはいえない。

そこで、選択する手がかりを得られるよう単元の導入で、両方の種目を一時間ずつ経験する時間を設け、自らの経験を基に選択できる環境をつくっていく。単元としては、この経験の2時間を含めた15時間で構成していく。

また、生徒はこれまでの授業の中でグループ学習がうまく成立されていない状況がある。5月に行った単元と、1・2・3年が縦割りで行った前単元で経験はしているが、自分たちで活動したり、計画を立てたりするというよりは、上級生に依存していた状態だった。そこで、本単元を選択種目の持つ特性を深めていくことに伴ってグループへの意識が高まり、結果的にグループ学習が充実していくことをひとつのねらいとしたい。ただし、生徒は上記のようなグループでの活動経験しかなく、自分たちだけで学習を進めていくことは容易ではないと考えられる。その克服の手立てとしてまずは、グループの中で班長・副班長・用具・コーチ等の役割分担をして、それぞれに責任感を持たせたい。さらに、話し合いの場を意識的に設定させ、そこで話し合わせる内容を生徒の活動を見ながら教師側から項目を挙げて、その手がかりとしていきたい。

授業の中では、積極的にゲームを取り入れていくことを考えている。生徒一人一人が、ゲームに参加し、チームに貢献する等の達成感や、充実感が味わえるようルールや場を工夫しながら単元を進めていきたい。

これから単元に入るに当たり、生徒を導いていく具体的な手だてなどをまだ詰めきれていない。新しく体育を学習していくスタート地点にいる中学一年生が、これから学習の仕方などを身につけていく最初の段階でどのような支援が必要になるのか、実態をしっかりと分析した上で考えていきたい。

●授業提案者の立場から（ハンドボール）

個の高まりからチームの高まりを目指して

東京学芸大学附属世田谷中学校 浅井 百合香（東京）

今回の全国大会で、ハンドボールの授業を出させていただくことになりました。ハンドボールという種目の魅力は、持ちやすいボールと、誰にでもシュートを決めることの出来る可能性が広がるゴールにあり、激しい攻防の中で、思いっきりゴールにシュートを打ち込むといった楽しさにあると考えます。

子ども達は、小学校時代に半数以上がハンドボールの授業経験がありますが、全く知らない・有名選手の存在によって知っている、という程度の子どものもいます。中学2年生で初めて経験するハンドボールでまずは、個のプレーにこだわり、自分のチームが勝利するために、自分の光るプレーは何であるかということん追求します。シュート、パス、ディフェンス、ゴールキーパー等、それぞれのプレーで自分がこだわっていきたいのは、どんなプレーなのかゲームの中で探り、明確にしていきます。そして、そのこだわりのプレーをチームプレーに活かすことができないか探っていきます。

個のこだわりをチームが認め、共有することが必要であり、さらにチームプレーとして活かすことができるのだろうか、といったことが課題になると感じています。自分のこだわり、必要性によって生まれてくるプレーを、どうやったらゲームに活かすことができるのか、そのつながりがないとチームがバラバラになる可能性があります。

単元前半では、自分の「個だわり」プレータイムとして練習時間を設定し、チームから離れて個々の練習に励みます。そして練習してきた「個だわり」プレーをゲームで意識しながら活かすことを大切にします。実際には、「個だわり」プレーが前面に出ているので、個人プレーに突っ走ってしまう場面もあるし、自分のプレーに満足して終わりという場面も見られました。そこで、チームの中で自分の「個だわり」を共有する意識を持たせることが必要になってきました。ゲーム前のチームミーティング等で、「今日の私はジャンプシ

ュート（個だわりプレー）を練習したから、ゲームで活かすよ。」といったチームのメンバーと個々の「個だわり」を共有します。ゲーム中やゲーム終了後に個々のメンバーの「個だわり」プレーがゲームに活かされたか、メンバー同士が意識できます。すると、シュートを意識していても、チームの仲間からパスが来なければ打てない、ディフェンスをいくら1人で頑張っても、全員で守らなければシュートは簡単に打たれてしまう。こういったゲームの展開に至ったとき、子ども達の中からチームとしての作戦が生まれてくることを期待します。

後半は、個々の「個だわり」プレーにプラスして、チームの連係プレーとして個を活かす面白さを感じて欲しいです。今のところ、自分自身に意識が向いている子ども達ですが、チームの高まりに向けて意識がどのように変わっていくのか、期待したいと思っています。

これまでの苦手な子にも優しいという視点とともに、得意な子も個の高まりを意識できる、夢中になれる授業とはどういったものだろうか、という視点で授業提案ができないか思案中です。どうぞよろしくお願いいたします。



■ 特集 ■ 竹之下休蔵先生 生誕百周年

● 竹之下先生との思い出

ある時、竹之下先生は…

沢田 和明（滋賀）

学生時代、竹之下先生の部屋にノックして入室しても、先生が気づかれないまま熱心に本を読み続けておられ、あらためて声をかけることをためらう「すごさ」を感じるがよくあった。演習では報告担当者が自分の報告に行き詰まり、誰かが「助け船」を出そうとすると、担当ではないことを指摘され、気まずい沈黙が続いたことも何度かあった。「夜寝てしまえば資料は準備できない」「何回読んだ。プレイ論の批判は、まず十分に読み込んでから」と、演習の雰囲気はいつも緊張の連続であった。諸先輩から以前はもっと厳しかったとよく言われたが、それにしても休憩時間に何度かいただいたお菓子が何とも懐かしい。

転任校での「体育科教育」担当について、竹之下先生から、学生時代の講義を例に、自分の専門領域を柱に組み立てて実践すればよいとの不安払拭の助言をいただき、それを拠り所に前向きな試行に取り組めた。転任を契機に参加した全体研では、メンバーの行動を生データとしたグループワーク、一つの基礎理論としてのプレイ論、参加者相互の専門家としての話し合いや情報交換、豊かな人間関係などに魅せられ、時には朝方まで語り合う経験もしながら、30数年が過ぎた。

ある時、竹之下先生は「授業が始まるまでと、授業が終わった後の子どもの姿を見れば、大体その授業の内容はわかる」と言われた。それから可能な限り、授業の前後の子ども達のホンネが見え隠れする姿の観察や、さらにその前後の無人状態での期待や余韻を大切に参観を心がけている。例えば、表現運動の公開授業の終了後、子ども達が楽しそうに踊りながら帰って行く姿、「終わったー！」と一瞬一目散に走って帰っていく姿、「先生、あれでよかったでしょ」と話す姿などを、それぞれの授業に出てくる時の姿や雰囲気と重ね合わせると非常に興味深い。人間は表情の豊かさで進化したと言われるが、授業前後の表情は授業内容の豊かさの指標でもあるように思う。

また「小学校では、ある教科の指導に優れた先

生の体育の授業を参観すると参考になる」と言われたことがある。かなり以前、ある中学校で全教科の先生が出席する保健体育の全国発表に向けた授業研究があったが、他教科の先生方の教科観や生徒観などからのするどい指摘を聞いて、「なるほど」と納得させられたことを思い出す。

何かの折、先生は「体育がなくなるための研究実践」の話をされた。体育の学習指導の現状が望ましい姿とかけ離れ過ぎているからこそ研究実践の積み重ねが必要とのことであった。もし学校に体育の授業がなくても理想的なスポーツや運動との関わり方ができるのであれば、学校での体育は不要になる。逆に学校の体育での嫌な思いが、体育や教師や学校嫌い、さらには生涯スポーツにまで悪影響があるとすれば、無駄というよりは有害な教育になる。理想的な体育が実践され、その結果体育が不要になる日はいつか来るのだろうか。

思えば、コンピュータ導入前の一流競技選手の国際比較調査や家庭婦人バレーボールの面接調査などの社会調査、都市社会学の磯村先生や大脳生理学の時実先生などの話、学会への参加姿勢、図書は読まれてこそその図書管理の考え方、「酒は自分で注ぐ」というドイツ仕込みの合理主義的な酒の飲み方などさまざまなことが、学生運動、新宿騒乱事件などとも重なって思い出される。

誰でも人生の分岐点を意識した恩師の影響力は強い。特に教職についた者としては、多くの無批判的受容や無意識的伝播、さらには恣意的解釈までもを含め、受けた教育の有り難さと同時に、教育の魅力や怖さを実感させられている。「初心忘るべからず」は、「基本忘るべからず」であるという。初心も基本も竹之下先生であったはずが、いずれも忘却の彼方の自分を反省している。

しばしのタイムスリップの好機に感謝し、逝去された諸先生方にもご出席願ひ、「競争発・協想経由・共創行」列車の中で、「体育の命のバトン」を肴に、受容・感動・拍手・握手・感謝・合掌を実感しながら、朝まで語り合いたいものである。

●竹之下先生との思い出

「思い出すことなど」

江島 紘（神奈川）

私が竹之下先生に初めてお会いしたのは今から45年ほど前になると思います。それ以降何度もご指導を受け、お話をうかがう機会に恵まれたのですが、生来の愚鈍である私は十分に先生のお考えを理解するに至らず、いたずらに時を過ごした感を否めません。まことに残念なことであるとも思っています。

最初、先生のご自宅へは私の父と当時体育の研究が盛んであった酒匂小学校の先生方（故須藤先生、今でもお元気な坂元、大木先生）とお邪魔したことを思い出します。その時は先生の話の内容についていけず、黙って聴いているだけであった。先生方の熱心な議論はまさに時間のたつのも忘れるほどであったが、先生はどっしりと椅子に座られ、うなずきながら話を聴き、考えを述べられるお姿を今でも思い出します。

だんだんと自分の意見を言えるようになりましたが、そんな若い中途半端な考えにも熱心に真剣に耳を傾けてくださり、丁寧なご指導をしてくださいました。本当にやさしさのあふれる先生であったことを思い出します。また、現場の若い私たちには気遣いしていただきました。授業に対するご意見を言われる時にも傷つけないように、落ち込まないようにして下さったように思います。

授業研究にもご一緒させていただく機会がたくさんあったのですが、いつも先生の周りには人がいっぱい、研究に参加した方々が先生のお話に耳を傾けておられました。一言も聴き逃すまいとする先生方の熱気も今は懐かしいものです。

授業に対してはたいへん厳しい目を向けておられました。経験を持った先生にはかなりきついことも言われました。授業をしている先生方の人柄を見ながら言ってわかる人、言わなくてもわかる人というような区分けをしていたのかもしれませんが。

授業を見ながら先生は授業をしている先生のことを聴かれることも多くありました。どんな先生なのか、独身なのか、お子さんはいられるのか、

今日はいつもと違うのか等なのですが、先生方の心身の状態が授業に影響を及ぼすことが多分であり、常日頃の学級経営が体育の授業にも出てくるものであると言われているのかと思いました。

私も指導主事時代に先生から教えていただいた授業の見方、人の見方を大いに参考にさせていただきました。

授業研究の後、先生と夕食をご一緒する機会も多くあったのですが、これがまた非常に有意義な時間でした。当然お酒が出るわけですが、先生はお身体の関係でしょうか、最初は、今日はここまでしか飲まないから言われます。私たちは先生その言葉を守ろうとするのですが、飲むほどにご自分で言われた量などをお忘れになってしまうこともよくありました。私たちはそのような時が最も楽しく、一番心に残る話が聴けたように思います。最も、私たちもお酒が入っていますから話の半分はどこかにいってしまっているのですが、今ではそれも良い思い出であると同時に残念なこととも言えます。

先生には授業のとき以外にも様々な機会にご一緒させていただきました。先生を駅にお迎えして授業の会場までお送りする時など、その途中でもいろいろと教えてもらいました。私たちの思いもしない視点からの話をしてもらいました。それが本当に勉強になりました。

先生から教えられたことはたくさんあります。先生の聲咳に触れたことがその後の教師生活に大きな影響を持ったと思っています。

先生に教えられたことは人に対して温かくあれということ。人を理解し、それぞれに持っている特色をつかまなければ人を指導できないということ。先生方に対しても、児童生徒に対しても最も大切なことを教えてもらいました。

先生の近くにいられたことが今の私に大きな影響を与えたと思っています。先生にはいくら感謝をしても感謝しきれません。本当にありがたいことでした。

事務局だより

全体研の「会費」について

全体研では、毎年の全国大会参加費にその年度の会費が含まれています。例えば、昨年の東京大会にA参加またはB参加で参加した方は、東京大会から今年の東京大会の前までの1年間の会費を納入していただいたこととなります。また、一昨年の和歌山大会には参加したが、昨年の東京大会には参加しなかった方は今年度の会費が未納ということとなります。全体研では2年間会費が未納の場合には会員資格を失うことになっています。東京大会以降も会員継続を希望される方は、至急会費の納入をお願いします。全体研の予算は、この会の趣旨に賛同した会員の方々の会費で成り立っています。ご協力のほどよろしくをお願いします。なお、会費の振込先等がご不明の方は事務局までお問い合わせください。

長見 真（宮城）

編集後記

- 第54回全国体育学習協議会東京大会が11月20日～23日の3泊4日の日程で開催されます。全体研ニュース109号はこの東京大会を目前にしての特集号です。東京大会は昨年に引き続いての開催となりますが、今までの全体研の歴史をみましても、研究委員会が主体となる東京大会を2年連続で行う前例はありませんでした。この全体研ニュース（109号）の研究委員長や授業者の考えをお読みになられまして参集いただきたいと思います。東京大会で、皆様とお会いできることを楽しみにしております。
- 今年、全体研の生みの親である竹之下休蔵先生の生誕100年にあたります。そこで竹之下先生と親交の深かった先生方から思い出などを綴っていただきました。また、12月5日（土）には、「竹之下休蔵先生生誕100周年記念シンポジウム」が計画されております。詳細は全体研のホームページ <http://zentaiken.com> からご覧ください。ホームページには、問い合わせ先等の情報も掲載されております。
- 今回は、メール配信希望会員にも、過去2回分とあわせて郵送でニュースをお届けしています。何かご不明な点等ありましたら、広報委員会までご連絡下さい。

広報委員会メールアドレス

info@zentaiken.com



島田左一郎（長野）

全体研ニュース
第109号

発行：平成21年11月7日／責任者：全国体育学習研究会・会長 菊幸一

編集：島田左一郎 長見真 小坂美保 豊島登

事務局 〒989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南 2-2-18 仙台大学体育学部 長見真研究室

TEL:0224-55-1134（直通）FAX:0224-57-2769（代表）／全体研ホームページ <http://zentaiken.com>